

アカランカのプラマーナ論

藤 永 伸

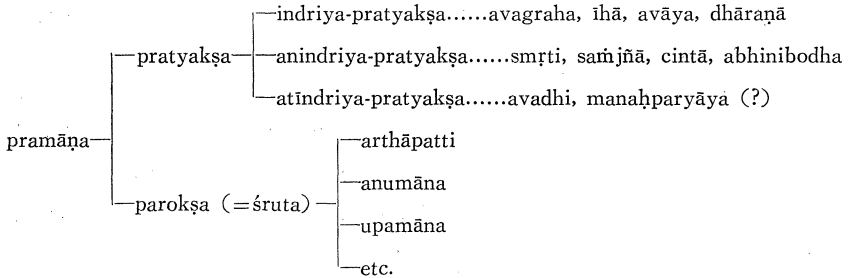
いわゆる「聖典期」におけるジャイナ教哲学の一特徴として他学派との交渉の少なさを挙げうる。この時代には、原子論、業論などがほぼジャイナ教内部の問題として論じられた。知識論も扱われたが、主に〈jñāna〉という語の下に検討された。一方、他学派では知識の問題は〈pramāṇa〉論であった。彼我の隔たりは用語上の問題のみならず、内容においても見える。しかし、他学派との交渉が不可避となるにつれて、この隔たりをなくそうとする努力がジャイナ教内部に起きた。この努力は「聖典期」後期の作品にみられ、また「論理学期」初期の著作中にもあらわれる。しかし、ジャイナ教の知識論が他学派に伍しうる様な内容と組織をもつに至ったのはアカランカ（西暦 720～780）の貢績による。即ち、彼はジャイナ教の伝統的知識論を基本として、他学派との論争に耐えうる様な体系を構築したのである。本稿では諸先学の業績をふまえつつ¹⁾、アカランカの知識論を「〈pramāṇa〉の分類」という点から検討する。

アカランカは pramāṇa を定義して「矛盾のない知識が pramāṇa である。未知の対象を認識するから。」「自己と対象（即ち他者）とを決定する確実な知識が（pramāṇa と）考えられる。」と述べている²⁾。これらの定義は何らアカランカの創意にかかるものではない。その大部分がシッダセーナの『Nyāyāvatāra』に拠っており、「未知の対象」云々は仏教やミーマンサー学派から借用したものと考えられる。アカランカ以後のジャイナ教論師は、pramāṇa を定義する際に「未知の対象」云々の規定を与えておらず、「自己と他者とを決定する知識」と述べる者が多い。ゆえに、pramāṇa の定義に関してアカランカの貢献は見られない。

著作の随所で述べている様³⁾に、アカランカは pramāṇa を基本的に pratyakṣa と parokṣa とに二分する。これはジャイナ教の伝統に基づいたものであるが、アカランカがウマースヴァーティの『T(attvārthādhigama) S(ūtra)』を再三引用することから、直接的に TS はに拠ったものであろう。また、この分類はアカランカ以後のジャイナ教論師が一貫して主張するものである。

アカランカによる pramāṇa の分類については『L(aghīyas) T(raya)』が主な

図 1



資料である。しかし、LT での分類はかなり混乱している。

まず、図 1 は LT § 61 および自注に基づく分類である。ここで *indriyapratyakṣa* に分類されている *avagraha*, *ihā*, *avāya*, *dhāraṇa* は TS I-15 で *mati* の一連の過程とされていたものである。また *anindriya*^o とされる *smṛti*, *samjñā*, *cintā*, *abhinibodha* は同じく TS I-13 で *mati* の同義語として扱われている。つまり、従来 *parokṣa* とされてきた *mati* がここでは二分されて *pratyakṣa* と成った。この「*pratyakṣa* = *mati* (感官知)」とする用法は他学派のそれと同様である。一方、*parokṣa* には他学派が認める種々の *pramāṇa* が分類されている。これに関連してアカランカが『*Rājavārttika*』I-20-15 で「*anumāna*, *upamāna*, *arthāpatti*, *śabda* などは *śruta* に含まれる」と述べている点に注目すべきである。

次に LT § 3~11 および自注による分類を見る。*mati* の同義語とされていた *smṛti* などがここでは *avagraha* などと同様に一連の因果関係にあると考えられている。そして、*dhāraṇā* が *smṛti* の因であるということによって *indriya*^o と *anindriya*^o とをも結びつけている。更に *smṛti* などは「言葉との結合以前は *mati* であり、言葉と結びつけば *śruta* である」とされている。そして、*samjñā*, *cintā*, *ābhinibodhika* を各々 *pratyavamarśa*, *tarka*, *anumāna* と言い換えている (*smṛti* はそのまま)。これには二重の意味がある。まず、*smṛti*, *samjñā* 等 *anindriya*^o が *śruta* つまり *parokṣa* にもなりうるという意味がある。衆知の様に他学派では感官や *manas* による認識は *parokṣa* である。しかし、ジャイナ教内部ではこのような認識を *pratyakṣa* とする者もあり、*parokṣa* とする者もあった。前者としてはシッダセーナ等があり、ウマースヴァーティは後者を代表する。アカランカはこの差異を「言葉との結合の有無」という基準で折衷的に解消しようとしたのである。次に *smṛti*, *pratyavamarśa* 等が二様であるとも解釈できよう。

アカランカ以前にブージュヤパーダは śruta を「自己の為のもの」と「他者の為のもの」とに二分し、前者を「知識を本質とするもの」、後者を「言葉を本質とするもの」と定義する⁴⁾。この様な分類はアカランカの採る所ではないが、既に『Rājavārttika』I-20-15 で言葉との結合の有無によって śruta を区分している。

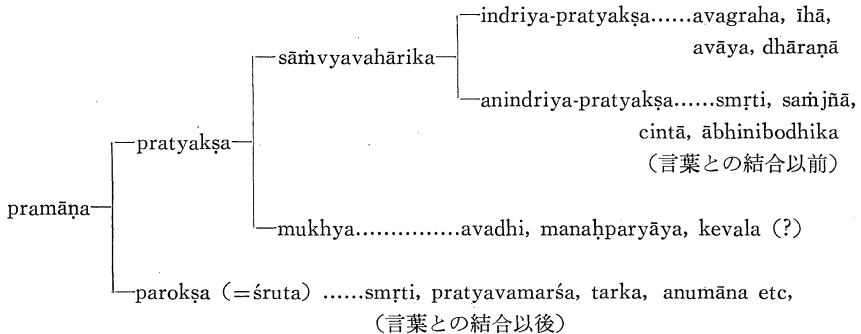
しかし、この分類、つまり言葉との結合の有無によって smṛti などを区分することは必ずしも確定的なものではない。ヴィドゥヤーナンディンは LT 10 cd, 11 ab を引用して言葉との結合がなくても知識はありうることを強調している⁵⁾。しかし、その一方では, pratyakṣa を三分して、その中のどれにも smṛti 等を入れず, pratyakṣa 中に分類している⁶⁾。またプラバーチャンドラは LT の同じ箇所を注釈して smṛti などは言葉と結合しなくとも parokṣa であるとしている⁷⁾。つまり両者とも smṛti などを pratyakṣa と認めていない。アカランカ自身もこの分類をのちに放棄している。

以上の様な LT § 3~11 および自注に基づく分類を図 2 に示した。これはアカランカの努力の跡がうかがわれるけれども、過渡的なものと言える。

次に LT § 25~26 および自注に基づく分類を図 3 に示す。原文では pramāṇa として pratyakṣa, śruta smṛti, pratyabhijñā, ūha (=tarka), anumāna, の六つを挙げている。一方, pratyakṣa, parokṣa という区分は明確ではない。しかし, pratyakṣa を独立のものとしているから他の五つは必然的に parokṣa となる。また, pratyakṣa を三分するという分類法もとられていない。

この様に LT における pramāṇa の分類は必ずしも一定していない。特に smṛti などをどの様に分類するかによって三段階にわかれる。つまり、単に pratyakṣa

図 2



saṃjñā=pratyavamarśa, cintā=tarka, ābhiniḥbodhika=anumāna.

図 3

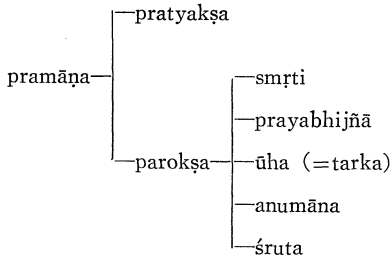
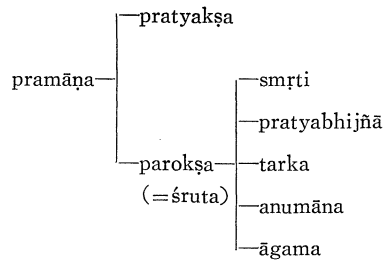


図 4



とするもの、言葉との結合の有無によって pratyakṣa か parokṣa に分けるもの、そして単に parokṣa とするものの三つである。

この不安定さの要因として LT の成立事情がある。『Akalaṅkagranthatraya』の序文で編者 Mahendra kumar Jain が指摘している様に⁸⁾ LT 中の pramāṇanaya-praveśa と pravacana-praveśa とは本来別個の書物であった。つまり、上に述べた § 61 とその他のものとは本来別個の書物に属するものであったが後に他者の手によって一つの書 LT の中にくみこまれた。この事情やアカランカ以前の pramāṇa 論との関連からすれば、図 1 に示した分類は他のものより先に成立したものと考えられる。

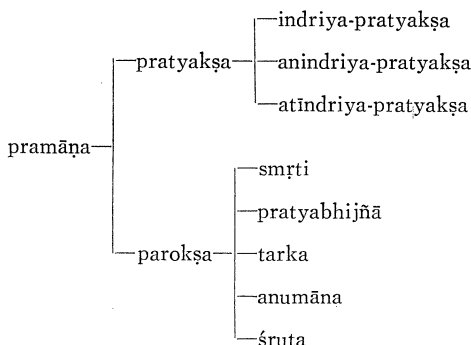
次に『Nyāyaviniścaya』§469 について見てみよう。ここでは pramāṇa が大きく pratyakṣa と śruta とに分割されており、後者の内容としては「pratyabhijñā など」とするだけである。しかし、後続する偈によれば、smṛti, tarka, 更には anumāna や āgama も śruta に含まれる。よって本書ではアカランカは pramāṇa を六つに、即ち pratyakṣa, smṛti, prayabhijñā, tarka, anumāna, āgama に分けており、pratyakṣa 以外の五つは śruta の名の下に分類している。これを図 4 に示した。

さて、アカランカ最後の書とされる『Pramāṇasaṃgraha』の冒頭で彼は次の様に述べている。

pratyakṣaṁ viśada-jñānaṁ tattva-jñānaṁ viśadam, indriya-pratyakṣam anindriya-pratyakṣam atindriyapratyakṣaṁ trividhā. Śrutam aviṣṭam pratyakṣā-numānā-gamanimittam. parokṣaṁ prayabhijñādi smarāṇa-pūrvakam.....dve eva pramāṇe iti.

ここで問題となるのは śruta と parokṣa との関係である。Śruta が parokṣa の言い換えにすぎないとすれば parokṣa には prayabhijñā などしかないことになる。「pratyabhijñā など」とは同書、Ⅱ、Ⅲ章からして smṛti, prayabhijñā, tarka,

図 5



anumāna を指す。つまり, āgama, 狭義の śruta に当るものが pramāṇa として認められないことになる。だから śruta=parokṣa と考えるのは困難である。

ヴィトッヤーナンディは「parokṣa に śruta や 〈pratyabhijñā など〉がある」とする⁹⁾。つまり, parokṣa として smṛti, pratyabhijñā, tarka, anumāna そして śruta がある。「śrutam pratyakṣa-」云々をどう理解するか問題が残るが, pramāṇa の分類についていえば, この説に従って全体を解釈する方がより合理的である。この場合の分類を図 5 に示した。

以上から明らかな様にアカランカによる pramāṇa の分類は首尾一貫したものではない。その原因は smṛti などを如何に規定するかにある。また, parokṣa (広義の śruta) の内容が一定していないことにも起因している。しかし, アカランカの最終的分類, つまり図 5 に示したものは彼以後のジャイナ教論師によって基本的に継承されている。

- 1) Jaina Ontology by K. K. Dixit (L. D. Series 10), Jaina Nyāya by K. C. Śāstri (Murtidevī Hindī Series 10) を特に参考にした。
- 2) Aṣṭaśatī (Bombay 1915) p. 175. LT § 3.
- 3) 以下に言及するアカランカの作品は『Rājavārttika』(Murtidevī Sanskr̥t Series 10)を除いて『Akalaṅkagranthatraya』(Singhi Jaina Series 12) にまとめられている。
- 4) Sarvārthasiddhi ad. TS I-6.
- 5) Tattvārtha Śloka-vārtika I-10-88.
- 6) Pramāṇaparīkṣa (Vanarasī 1914). p. 68.
- 7) Nyāyakumudacandra ad LT 10 cd, 11 ab.
- 8) Prastāvanā pp. 34~5.
- 9) Tattvārtha Śloka-vārtika I-11-179 以下。

(広島大学大学院)